

望岳山荘

にて

—中嶋嶺雄

毎年、広島・長崎の原爆忌を過ぎ、八月十五日の終戦記念日が巡ってくる頃になると、戦争中のことや敗戦直後のことが、改めて想い起こされる。

とはいっても、終戦を国民学校三年生で迎え、幸いにして信州は戦火を免れたこともあって、私が戦中・戦後

について語れることなどごく少ないのだが、先般、雑誌『諸君!』(文藝春秋)が七月号と八月号で「進駐軍(GHQ)がやって来た!800人の証言」という特集を組み、私も奇稿を求められたので、同誌八月号に「進駐軍と『ケリー旋風』」と題する小文を執筆した。

終戦を境に、それまで使っていた教科書(読本)を担任の先生の指示で真っ黒に塗りつぶした、いわゆる墨塗り世代としての松本市立源池国民学校(現在の源池小学校)での体験や、当時の松本市へは昭和二十年の十月初めに二百人ばかりの進駐軍がやって来てジ

リレーコラム



ウィリアム・ケリー教育官が源池小学校を視察に来たときの私の印象を語って、こう結んだのであった。

「このケリー教育官こそ、信州の教育界に

まだテネシー大学に在学中の大学生で、アメリカ版の学徒動員兵であったことを、私は後になって知った。」

この小文が、意外に多くの反響を呼んだの

「ケリー旋風」の残影

いわゆる『ケリー旋風』を巻き起こして、軍国主義教育の一掃から一転して全国に広がるレッド・パージに火をつけた占領期進駐軍の象徴的な人物であった。ケリー氏は、当時

在住の市川正三氏からのお手紙であった。同氏は当時、新制の大町高校二年生で『大町高校新聞』を編集しており、昭和二十四(一九四九)年二月の年度最終号でケリー軍政官にインタビューを行って紙面を作ったという。

二月の寒い日に長野市郊外の軍政部を三人で訪ねたが、ケリー中尉の印象は私と同様に大変な美青年で、しかし質問にはまともに答えずアメリカの学制について長々と講じたという。「少年だったわれわれにも、『ケリー』の名が頭にあったのは、彼が信州教育界でいかに敏腕をふるっていたかの証左でもあります」と市川氏は述べている。

ケリー氏は当時二十七歳だったというから、健在なら現在は七十八歳である。同氏がその後どのような人生航路を辿ったのかについては、私も知らない。

(東京外国語大学長 松本市出身)